

スクールソーシャルワーカーの仕事

④りくとくん

高名 祐美

スクールソーシャルワーカー（以下SSWと表記します）は、学校に在籍する児童・生徒が抱える問題の解決を支援する専門職です。学校と家庭、そして地域社会をつなぐ役割を担っています。いじめや不登校、虐待などの問題に対して、社会福祉の専門知識と技術を活かし、子どもや保護者、教職員と連携しながら、問題の解決を支援します。今回は特別支援学級に在籍する、「学校がおもしろくない」と不登校になっている『りくとくん』を通して、SSW業務の実際について書いてみます。

＜学校からの依頼で支援がはじまる＞

りくとくんは小学6年生。特別支援学級に在籍している。母、祖母、二人の姉、小学2年の妹みこちゃんとの6人家族である。りくとくんが4歳のときに両親が離婚し、母親が子どもをつれて実家に戻ってきた。それからずっと母の実家でりくとくんは生活している。シングルマザーの母は仕事中心の生活で、学校からの連絡にも応じることがあまりできていない。りくとくんは、6年生になってから欠席することが増えた。そこで不登校への対応と家庭への関わりをと、学校からスクールソーシャルワーカーに支援依頼があった。

5月。教育事務所から支援依頼の電話を受け、担当することになった。学校訪問し、りくとくんの現在の状況、家族のこと、これまでの経過と学校での取り組み内容、担任や校長が抱いている思いや考え方を聞き取った。りくとくんの妹みこちゃん（小学2年）も、最近は欠席することが多くなっていた。

＜まずはアセスメントする＞

○学校から情報を得る

5年生の11月頃より「朝起きられない」という理由で、学校を欠席することがあった。6年生になってからは、欠席が増え、登校した日はほとんどが遅刻。スクールバスの時間に間に合わないときは、町の無料バスを使う。その方法なら登校はできるが、始業時間には間に合わない。登校できたら帰りのスクールバスの時間まで学校で過ごすことができていた。母・祖母が車を所有しておらず、家族が学校まで送ることができない。そこで、学校は対策として、手の空いている教諭（主には校長）が自宅まで迎えに行くことにした。学校から担任が電話を入れて、迎えの時間を決める。その時間までに起床して身支度を整えておくというルールを設けた。それでなんとか登校できていた。

朝起きられないのは夜ふかしによるもので、Youtubeを見たり、ゲームをしたりしてときには朝方まで起きている。その結果、スクールバスで登校する時間には起きられない。また偏食がひどく、学校給食もほとんど食べない。食べるのは白いご飯と牛乳だけ。家ではチャーハン、ヒレカツ、フライドポテトなどで野菜は全くといっていいほど食べない。身体は標準よりも小さく、歯もみがいていないせいで虫歯も多い。治療を促しても、歯医者への受診もしていない。水が嫌いという理由でお風呂もなかなか入らない。学校行事に母が参加することも少なく、学校と家庭とのつながりが薄い状況だった。

○家族と面接して家庭の状況を知る 家庭訪問で祖母との面接

学校から聞き取ったのち、家庭訪問を計画した。祖母は学校からの連絡に必ず応じてくれるため、まずは祖母と面接することとした。学校からSSWについて祖母へ説明をしてもらったのち、日時を約束し家庭を訪問した。祖母は家の外まで出て、SSWを迎えてくれた。

家族との面接では、ジェノグラムを丁寧に一緒に描くようにしている。そしてその家族の日常的な一日の流れ・過ごし方とこれまでの歴史を聴き取る。食事の時間や場所、家族それぞれの居室や記念日の過ごし方など自然な流れで聞いていくようにしている。祖母はSSWの質問にはスムーズに答えを返してくれ、りくとくんの家庭の様子が少しずつわかつってきた。家事は一切祖母がになっている。祖母は孫4人と母になった娘を含め、5人の子育てをしているように感じる暮らしぶりだった。

「おばあちゃん」と呼んだが、年齢を聞くと62歳。（自分より若い！）20歳で嫁ぎ、すぐに子どもに恵まれたとのこと。そしてりくとくんの母もまた20歳で結婚、すぐに長女を出産したと聞いた。62歳で18歳をかしらに4人の孫。そのうえ38歳の娘が4人の子の親となったのちも娘のまま、暮らしを続いている。

祖母に、日頃の孫との関わりをねぎらいつつ、母と話をできないかと問うと、

「ええ、大丈夫だと思います。私から話しておきます。」と。次回は母の休日に合わせてSSWが家庭訪問し、母と面談することを約束した。

りくくんは、SSW訪問時(平日の午前中 本来は登校して家にいない時間)にはまだ寝ていた。祖母が起こして連れてきてくれたが、SSWには言葉もなくまた寝室へと戻っていった。妹のみこちゃんも登校しておらず、パジャマのままで、SSWの声掛けに返答はなかった。母は仕事に出かけて不在だった。

○母との面接

祖母の力を借りて、母と面接するため再び自宅に訪問。母親の就労状況、こどもとの関わり、学校への思いについて聞き取りした。一日の過ごし方を聞くが、食事はりくくん、みこちゃん食べない。寝るのも別室、ふたりと過ごす時間をほとんどもっていなかった。そして「あの子らは、私(母)のことが好きじゃないんです。ばあちゃん子なんです。ばあちゃんが母のようなものです。」「私はどうしても怒るだけの人になってしまっているので、私のそばにはよってこないのです。」と悪びれもせず語る。

母の仕事はフランチャイズのアイスクリームショップの店長。りくくんの姉二人(高校3年・高校2年)は、そのアイスクリーム店でアルバイトをしている。アルバイトを通じて母と過ごす時間が長女・次女にはあった。母が4人のこどもを上二人、下二人と線を引いているように感じた。なぜ、「あの子らは私のことを好きじゃないんです。」と口にするのだろう。一緒に過ごす時間をもとうとしないのだろう。母はどんなこども時代をすごしてきたのだろう。祖母は娘のことをどう思っているのだろう。面接を終えて、記録を書きながら私の中には疑問がいくつも湧いてきた。

〈ケース会議を開催する〉

課題を学校と共有し、アクションプランを検討するために、学校でケース会議を開催した。学校側は、校長・教頭・担任・特別支援コーディネーター・指導主事が出席。SSWはジェノグラムを提示しつつ、祖母・母との面接結果から捉えた課題について説明する。不登校の背景にある昼夜逆転、基本的生活習慣の欠如、偏食、親と過ごす時間の少なさ。りくくんの生活を改善するには何ができるのか、意見を交換する。学校が行ってきたこれまでの支援を承認しつつ、課題解決に向けて目標設定し、アクションプランと役割分担を行った。

〈支援の実際 そして今・・・〉

りくくんの生活に大きな変化はないが、登校するタイミングを自分で決めて、週に1日は登校するようになった。夜ふかしや偏食、お風呂嫌いは変わら

ず続いている。妹のみこちゃんが常に母の枕を抱えて、家から出なくなっている。言葉も少なく、甘えたような囁語を話すのみである。その姿からは、言葉では伝えられない「母と一緒にいたい」という思いが感じられる。

母へみこちゃんを一日1回ハグすることを提案したが、母はバツの悪い表情で「え？ハグですか～できないですね・・・」と。お風呂に入らないりくとくんに、「あの子はあまり臭わなくて。でも首には垢がたまってるんですよね。着替えもしないし。水が嫌いなんです。」と返答する。母なりに対処しようとしているのかさえ疑問に思うこともある。

町のこども家庭センター、児童相談所とも対応について相談し、「連携」を意識している。偏食については、知り合いの管理栄養士に相談もしてみた。学校との情報交換は継続している。しかし、目標達成には至っていない。

私は月に1～2回は母と面接し、母の行動変容につながるような関わりを続けている。

＜スクールソーシャルワーカーの役割＞

学校と家庭、そして地域社会をつなぐ役割は担えているのだろうか。

不登校、子育てへの関わりのうすさに対して、社会福祉の専門知識と技術を活かせているのだろうか。

子どもや保護者、教職員と連携しながら、問題の解決を支援しているのだろうか。

今一度 SSW の役割について考えてみる。

自分が実践していることがスクールソーシャルワークなのか。悩むばかりの日々を過ごしている。